

## ～ 「反軍演説」を行った斎藤隆夫（教科書 p.236～237）

◆単元名：第6章 二度の世界大戦と日本 3節 恐慌から戦争へ

③ぜいたくは敵だ ▶戦時体制と国民生活の統制（教科書 p.236～237）

◆本時の目標：国家総動員法の制定や、大政翼賛会・隣組などの組織が、戦争遂行のために果たした役割について考える。／政府は、メディアや教育、生活物資などを通じて国民生活を厳しく統制したことや、植民地の人々に対しても、日本人に同化させる皇民化政策を強めたことを理解する。

## □指導にあたって：

1938年、日中戦争が長引くなか、軍部の強い要求により、政党や経済界の反対をおさえて国家総動員法が制定された。当時の国民は、工場などに動員されて働かされたり、生活全体にわたって厳しい統制を受けたりするようになった。こうしたなか、日中戦争を長引かせる政府や軍部に対し、国会で厳しい批判を唱えた一人の政治家がいたことを紹介したい。政治を主導する人々の間にも対立があったことに気づかせ、言論の自由についても触れながら、戦争がこの時代の体制や国民生活に与えた影響や役割についてさらに考えを深めさせるきっかけとしたい。

## 「反軍演説」を行った政治家・斎藤隆夫

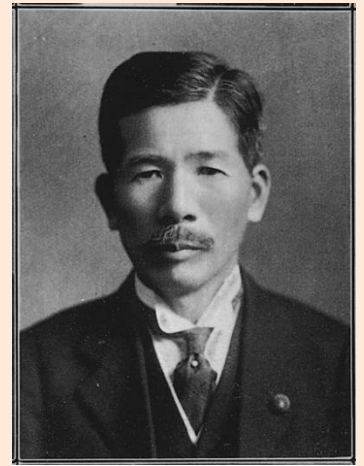
1937（昭和12）年7月の盧溝橋事件（支那事変）をきっかけに日中戦争が始まり、その後、国家総動員法が制定され、日本は国をあげて戦時体制へと動いていきました。そうしたなか、1940（昭和15）年2月の国会で、斎藤は「支那事変処理を中心とした質問演説」（反軍演説）を行い、「聖戦などといってもそれは空虚な偽善である」と訴えました。この演説は「聖戦を冒瀆するものだ」と陸軍の反感をかい、斎藤は懲罰委員会にかけられました。斎藤は政党からの離脱を決断しましたが、騒ぎは収まらず、国会議員から除名されます（除名への賛成296票、棄権・白票144票、反対7票）。

しかし、この処分後の1942（昭和17）年に総選挙が行われ、斎藤は非推薦にも関わらず、最高得点で当選を果たしました。斎藤は、国会で自由主義の立場を取り続けました。

1945（昭和20）年、日本は敗戦し、マッカーサーを最高司令官とする連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）により、日本の政治改革が行われました。戦後も国会議員を務め続けた斎藤は入閣を要請され、一度は断りながらも強い勧めを受けて、国務大臣を2回務めています。

斎藤の演説には定評があり、国会における名演説は三つあるといわれています。一つめは1925（大正14）年の「普通選挙法に対する賛成演説」であり、二つめは1936（昭和11）年の「肅軍演説」、そして三つめが1940（昭和15）年の「支那事変処理を中心とした質問演説」です。斎藤は、いつも原稿を持たずに演説をしていました。原稿は演説の数日前に完成させ、庭を散歩しながら完全に暗記したのちに演説したといえます。

斎藤は、1949（昭和24）年10月、80歳の生涯をとじました。「言いたいことを言うのではない。言わねばならないことを言うのだ」という精神は、令和の現在においても多くの人からの尊敬を集めています。生誕の地・兵庫県豊岡市出石町中村には斎藤隆夫記念館「静思堂」が建てられ、日本のために奔走した斎藤の歴史を記した資料が多く展示されています。



↑ 斎藤隆夫  
(1870～1949)

兵庫県豊岡市出石町中村に生まれる。1912（明治45）年、衆議院議員に当選し、以後13回当選を果たす（落選は1回のみ）。立憲国民党、立憲同志会、憲政会、立憲民政党に所属。戦後、日本進歩党結成に参加。第1次吉田茂内閣（1946～1947年）と片山哲内閣（1947～1948年）で国務大臣を務める。

\*本資料は、「(公財)たんしん地域振興基金」サイトなどの情報をもとに作成しています。  
\*右の二次元コードから、よりくわしい資料が見られます。(外部サイト)

